

活動報告 (2017.1 ~ 2017.12)

(1) 所員会議

第1回 2017年5月11日(木)

議題

1. 2016年度事業報告および決算報告について
2. 2017年度事業計画および予算について
3. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
4. 愛知大学総合郷土研究所規程の一部改正について
5. 総合郷土研究所所員以外の構成員の任命および再任手続き要領の一部改正について

(2) 運営委員会

第8回 2017年1月12日(木)

議題

1. 非常勤所員および研究員の継続確認について
2. 総合郷土研究所図書利用規程の制定について
3. 図書から雑誌への登録変更および図書除籍について
4. 総合郷土研究所所長および運営委員の当選辞退の取扱いについて
5. 2017年度運営委員の学外研修に伴う欠員の対応について

追加議題

1. 愛知大学総合郷土研究所規程の一部改正について

第9回 2017年2月24日(木)

議題

1. 愛知大学総合郷土研究所規程の一部改正について
2. 総合郷土研究所図書利用規程の制定について

第1回 2017年4月27日(木)

議題

1. 2016年度事業報告および決算報告について
2. 2017年度事業計画および予算について
3. 総合郷土研究所構成員の加入・継続申請について
4. 2017年度研究費のご案内について
5. 総合郷土研究所所員以外の構成員の任命および再任手続き要領の一部改正について

第2回 2017年6月1日(木)

議題

1. 研究費の執行について
2. 前期購入図書のアンケートについて
3. 2018年度ブックレット執筆希望者の募集について
4. 立命館大学受託研究および間接経費執行計画書について

第3回 2017年6月29日(木)

議題

1. 前期購入図書について
2. 2017年度紀要第63輯の発行について

第4回 2017年7月27日(木)

議題

1. 2017年度紀要第63輯執筆者について
2. 2018年度ブックレット執筆者について

第5回 2017年9月21日(木)

議題

1. 後期購入図書のアンケートについて
2. 2017年度補正予算について
3. 2018年度新規予算申請について
4. 愛知大学総合郷土研究所「紀要」投稿要項および執筆要領の一部改正について

追加議題

1. 立命館大学受託研究間接経費執行計画書について

第6回 2017年10月26日(木)

議題

1. 後期図書購入について
2. 2018年度新規予算申請について
3. 立命館大学受託研究間接経費執行計画書について
4. 2017年度紀要第63輯執筆者について

第7回 2017年11月30日(木)

議題

1. 2018年度予算申請について
2. 旧研究所の取扱いについて

第8回 2017年12月14日(木)

議題

1. 所長および運営委員改選に伴う選挙管理委員の選出について
2. 非常勤所員および研究員の継続確認について

(3) シンポジウム

日時：2017年3月18日(土)

13時30分～17時

場所：愛知大学豊橋校舎 記念会館小講堂

テーマ：怪談・民話を地域資源として受け継ぐ
— 小泉八雲、ふるさと怪談に学ぶ —

講演：地域資源としてのふしぎ文学

～小泉八雲と怪談の活用をめぐる～

講師：小泉凡

(鳥根県立大学教授・小泉八雲記念館館長・小泉八雲の曾孫)

コメンテーター：東雅夫

(アンソロジスト・文芸評論家)

薩摩琵琶による演奏と講話：村田青水

小泉八雲『怪談』より<おしどり>

パネルディスカッション

パネリスト：小泉凡、東雅夫、豊田高広(田原市中央図書館館長)、内浦有美(兼コーディネーター、総合郷土研究所研究員・株式会社うちうら・ぱったり堂代表)

日時：2017年11月18日(土)

13時30分～16時30分

場所：愛知大学豊橋校舎 本館第3・4会議室

テーマ：びんびんコロリ願望

— 長寿社会の死生観 —

講演1：老化と発達からびんびんコロリ願望を考える

講師：長田久雄(桜美林大学教授)

講演2：ピンピンコロリは健康長寿か？

地域包括ケア時代の新しい健康観

講師：渡邊大輔(成蹊大学准教授)

講演3：死を生きる

～最期をどこで迎えますか？～

講師：成田昌代(愛知国際病院看護部ホスピス師長/緩和ケア認定看護師)

討論

パネリスト：長田久雄、渡邊大輔、成田昌代
コーディネーター：武田圭太(総合郷土研究所所員、文学部教授)

(4) 公開講演会

日時：2017年7月22日(土)

13時30分～15時30分

場所：愛知大学豊橋校舎 6号館610教室

演題：江戸時代の地方役人と村人の日常の日々—「三河国八名郡岡部藩半原陣屋御用状留帳」を読む—

講師：神谷智(総合郷土研究所所長、文学部教授)

(5) 刊行物

愛知大学総合郷土研究所紀要 第62輯

江戸時代の地方役人と村人の日常の日々—「三河国八名郡岡部藩半原陣屋御用状留帳を読む」—(ブックレット26)

(6) 地域見学会

文責：近藤暁夫

日時：2017年12月10日（日）

テーマ：八雲と直虎

見学地：静岡県焼津市・浜松市井伊谷（図1参照）

参加者：23名（学生17名）

■企画概要

近年の総合郷土研究所の地域見学会は、春期セメスター中に開催していたが、2017年度に関しては担当運営委員が春期期間中学外研修中であったため、異例となる年末（12月）開催となった。なお、来年度からの地域見学会は例年通り春期セメスター期間中に開催する予定である。

本年度は、2017年3月18日に総合郷土研究所の主催するシンポジウム「怪談・民話を地域資源として受け継ぐ——小泉八雲、ふるさと怪談に学ぶ——」を開催し、好評を得たことを受けて、小泉八雲ゆかりの地である静岡県焼津市を対象に実施し、シンポジウムの内容を現地直接見学するという連動型の企画として開催することにした。また、折角焼津まで行くのであるから、道中でもう一か所見学先の選定を考え、2017年のNHK大河ドラマ『おんな城主 直虎』の舞台として本年の静岡県内で最も盛り上がりを見せた地域である浜松市井伊谷地区を組み込む形で企画を立てた。予備調査を経て、焼津市や龍潭寺等現地とのやり取りを重ねつつ、具体的なスケジュールを練った上で、2017年11月に学内構成員（教職員・学生）を対象に、企画への参加募集を開始した。

今年度の地域見学会は、時期的な問題もあって昨年度よりも少ない参加者となったが、参加者に対して行ったアンケート（配布19、回収19）において、満足度を訪ねた設問に10名が「大満足」と回答していた。回答者の過半数から最高の評価が得られたのは

見学会参加者に対してアンケートを取り始めてから初めてのことで、企画の狙いは達成できたものと考えている。

■当日のタイムスケジュール・見学地

当日のタイムスケジュールと行程を図1、表1に示す。以下、簡単に当日の行程と内容を説明する。

当日の天気は崩れるとの予報に反して快晴、9時に愛知大学豊橋キャンパスに集合し、大型バスに乗車、出発する。全員が時刻どおりに集合したのは数年ぶりである。

車中では、まずスタッフの挨拶ののち、沿道の車窓景観の解説を適宜加えつつ、パンフレット（A4版で12ページ）をもとに当日のスケジュール等について説明を行った。資料等の説明は主に近藤が行ったが、歴史に関する部分は山田邦明所員の解説を仰いだ。今回の行程は豊橋市から東名高速道路豊川ICを経て、静岡県湖西市、浜松市、磐田市、袋井市、掛川市、菊川市、牧之原市、吉田町を経由して焼津市に至るといふ、三河から遠江、駿河をまたぐ長駆のものである。しかし、それはその分沿道の諸々を実地で学ぶことができる機会でもあり、地理学と日本史学を専門とする両者の解説によって参加者には当該地域の歴史と地理について基礎的な理解を得ることができたであろう。三河と遠江の境は低い山で地理的にはほぼ連続すること、遠州に広がる台地や丘陵地の土地利用、浜名湖の温泉観光と戦国時代の様相、天竜川の水運、天竜川を挟んで西と東に二分される遠江の地域区分、暴れ川としての天竜川の歴史と地形、磐田原の遠江国府、小盆地である掛川が東遠州の中心になった経緯、牧之原の開拓、大井川の水量の変遷など、車中での話題は途切れることがなかった。

懸念していた交通渋滞もなく、ほぼ予定通り焼津市に到達し、「やいづさかなセンター」を横目に最初の目的地である焼津市歴史民俗

資料館を目指した。歴史民俗資料館は、ホールや図書館と一緒にあった複合文化施設である焼津市焼津文化会館の中にある。次の目的地である焼津市小泉八雲記念館も同一の敷地内にあり、オールインワンで焼津市に関する文化的な施設をまわることができる立地にある。当資料館においては、学芸員（焼津市教育委員会文化財課）の細田和代さんの説明と展示案内を頂戴した。焼津市は水深の深い静岡湾に面した良港が立地可能な地勢にあるが、市域は南北に細長く、南半分は大井川の度重なる氾濫に襲われたこと、漁港を含む市街地は北側に集中してきたことなど、大判地図を用いた細田さんの説明に、参加者は真剣に聞き入っていた（写真1）。



写真1 焼津市歴史民俗資料館にて

漁業のまちとして全国的に著名な焼津市は、特にマグロ・カツオにおいて全国トップクラスの水揚げ量を誇り、現在でも多くのマグロ漁船の母港になっている。1954年にマーシャル諸島ビキニ環礁で行われた水爆実験で被爆した第五福竜丸も焼津を母港としていた。また、第五福竜丸の無線長で翌年死去した久保山愛吉氏も焼津市の出身で、墓も市内にある。このようなマグロ漁の繁栄と第五福竜丸の悲劇をふまえ、焼津市は核廃絶と平和運動に市民をあげて活動しており、資料館の展示においても大きく取り上げられている。ビキニ水爆や第五福竜丸事件についての知識

はあっても、それが焼津を舞台にしていたことや、焼津で行われている平和運動について知識がある学生は少なく、なおかつ実際に焼津を訪れたことのある学生はさらに少ないだろう。核兵器や平和の問題について、現地見学を通し身近なこととして捉えなおすという教育的観点からも、本資料館を見学先に選んだ価値はあったと考える。

続いて、隣接する焼津小泉八雲記念館を来訪し、学芸員の那須野絢子さんにご説明いただいた。那須野さんは英文学を専攻され、記念館勤務の傍ら大学でも教えておられるという研究面でも第一線の方で、小泉八雲の文学と焼津の関係を中心にした詳細なレクチャーに学生も食いついていた。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、ギリシャのレフカダ島でアイルランド系の父とギリシャ系の母の間に生まれた。幼い折にアイルランドに移住し、母とは生き別れる。アメリカのニューオーリンズ（余談ながら、地域見学会の当日は八雲との縁にちなんで記念館主催のジャズコンサートが開催されていた）で新聞記者をするなど各地を遍歴したのち、1890年に来日して英語教諭となる。小泉八雲ゆかりの地としては、妻、小泉セツと出会い日本名の八雲の由来となった島根県松江市が有名で、当地にも小泉八雲記念館があるが、実際に八雲が松江にいたのは1年程度で、終の棲家は東京（1896年に東京帝国大学の英文学講師となる）であった。焼津との縁は、1897年の夏に家族で避暑と海水浴のため訪れてからである。故郷のギリシャの海にも似た焼津の海を気に入った八雲は、それから亡くなるまでほぼ毎年の夏を焼津で過ごし、多くの文学作品も残している。焼津市小泉八雲記念館は、八雲と焼津の縁を記念し、2007年に開設された。名誉館長は八雲の曾孫にあたる民俗学者の小泉凡氏である。小泉凡氏には、2017年3月の郷土研シンポジウムでも基調講演を賜った。

小泉八雲記念館を出た一行は、再びバスに乗車し、八雲が夏をすごした焼津港を目指した。現在の焼津港は、八雲の時代の波打ち際を更に造成して新たな護岸がつくられており、この上に漁協施設や深層水ミュージアムが建てられている。今回は、深層水ミュージアムや海洋深層水を利用した健康増進施設のアクアスやいづに隣接した、「まぐろ茶屋」で港湾見学を兼ねて昼食を取った。店名のとおり特産のマグロを中心とした海産物をふんだんに用いたメニューを提供しているが、今回は鉄火丼を全員で賞味した（写真2）。参加者のアンケートでもその味について非常に好評であった。本企画は特別昼食メニューを売りにしているわけではないし、それ目当てに参加されることも本末転倒だが、それでも「食文化」は地域の非常に大きな資源である。今回の焼津のような食文化に特長のある地域に関しては、特産品や郷土料理に触れることにも積極的な意味があるだろう。企画側にとっても「昼食メニューや会場の選定に困らなかった」という点では焼津を見学先にしたことは有難かった。



写真2 昼食会場にて

昼食後、港湾見学の時間を取り、13時半に焼津港を出立した。往路同様、東名高速道路を用い、途中に三方原古戦場を經由して、予定通り15時に井伊谷の龍潭寺に到着した。井伊谷は、浜名湖の北方に開けた南北2km、

東西1km程度の小盆地である（図2）。盆地の北端に城（井伊谷城跡）を構え、その麓に集落が形成されている。城-集落-耕地（水田）-山林という明瞭な同心円構造が確認でき、「中世以来の武士団が拠点とした小世界」の面影が今に残っている。2017年のNHK大河ドラマ『おんな城主 直虎』は、ほぼ終始ここを舞台としたドラマであり、このような小世界を舞台にして一年ものの看板ドラマを作成したことは、その成否は議論あろうが日本の放送史に残る試みであったといえよう。しかしながら、知名度だけは突如全国区になった井伊谷に実際に行ったことのある日本人は少なく、今回の企画につながった。

小盆地である井伊谷に割拠したのが、中世豪族井伊氏である。初代は平安時代の生まれとされているが、実際に井伊谷を根拠とした武士集団に成長したのは中世期からであろう。それでも、今川氏や松平氏（徳川氏）のような統一的権力が発達しなかった遠州においては、井伊氏は有力な武士団のひとつであり続けた。南北朝期には遠州の有力豪族として、宗良親王（後醍醐天皇王子）を奉じて南朝方で戦った。浜名湖の北岸に半ば閉鎖された井伊谷の小世界が最も日本史の表舞台に出たのは、（2017年を除けば）この時代だろう。明治期の創建であるが、龍潭寺に隣接して宗良親王を祀る井伊谷宮がある。

龍潭寺は、井伊氏の菩提寺であり、大河ドラマにおいて主人公直虎が出家した場所でもある（写真3）。度々劇中に登場したこと、現在も井伊谷に残っている往時をしのばせる施設が同寺程度であることから、井伊谷観光の拠点として2017年には非常に多くの観光客を集めることになった。ただし、寺院自体は遠州屈指の古刹として、サツキの名所として地元では以前から知られている。徳川家康の四天王のひとり井伊直政（系図上は井伊氏24代）が後に彦根初代藩主になったことから、彦根にも同名の寺院がある。



写真3 龍潭寺にて

今回の見学では、まず寺院の奥にある墓地に祀られている井伊氏累代の墓を山田所員、神谷智所長の案内で見学した。中世から近世にかけての墓地と墓石の特徴について、専門家に直接案内を受ける機会は貴重であり、参加者特に学生は熱心に見学していた。その上で、全員で龍潭寺の本堂（彦根藩井伊氏の庇護を受け境内の建物は非常に立派である）や小堀遠州の作になる東海地方屈指の名園として知られる庭園の見学を行った。また、当地では全部で1時間半という十分な時間を取り、自由に井伊宮谷や旧城下を見学してもらった。当時の武士団が割拠した小世界の空間スケールを、実地で触れる機会になったと思う。

予定通りに井伊谷を16時半に出立し、井伊谷から北に向かう。井伊谷の北方は中部山岳に連なる山地になっており、当地が浜名湖に面した平地・海の世界と中部山岳の間に形成された小世界であることを改めて実感できる。帰路は新東名高速道路の浜松いなさジャンクションから三遠南信自動車道と接続する新東名のバイパスを経由して東名高速豊川ICを目指した。三遠南信自動車道は、現在いなさJC方面からは新城市の鳳来峡ICまで開通しており、2018年度中には東栄町まで延伸する予定である。これが無事開通すれば、郷土研の地域見学会で行けるエリアも、より広がるのが期待される。

途中の交通状況にも恵まれ、豊橋駅で一旦希望者を降ろした後、予定の18時よりも若干早く、無事全部の行程を終えて愛知大学豊橋キャンパスにて解散した。参加者は昨年度よりも少なく、季節的にも寒冷で日照時間が短く決して見学会に適した条件ではなかったが、当日は晴天で風もなく、大河ドラマのクライマックス（地域見学会の翌週が最終回）にも合致して充実した見学会であったといえる。

■参加者のアンケートから

参加者（スタッフを除く）に配布したアンケートから、感想を簡単に紹介したい。

表2にあるように、参加者からは非常に高い評価を得られた。また、来年度の参加にも前向きな回答が多かった。これは昨年度もみられた傾向であるが、本年度は昨年度よりもさらに全体の満足度が高く、翌年度の企画参加に積極的な意思を示す参加者が多くみられたことが好材料である。特に、アンケート回答者の大多数が学部生であることを考えると、このような好意的な評価や積極的姿勢は、総合郷土研究所の地域見学会が、学生の自発的な学びを促すという教育面においても一定の成果を上げているものと判断でき、研究の枠を超えた意義を持っていることを再認識できる。

今回の参加者は全体としては昨年度よりも少ないものの、「チラシ・掲示をみて」参加を決意したとの回答者の比率が高く、自発的な参加が多いのは喜ばしい。その反面、口コミ等の参加の広がりには欠け、これが全体の参加者数を減らした一因だろう。企画の質については概ね評価が得られているので、それを十分に伝えて口コミにつなげ、参加を促す広報体制の構築や、リピーターの確保が今後とも重要だと考えられる。また、今年度の参加者は学部3年生が多く、来年度の企画にはなかなか参加が難しいと考えられることがか

ら、学生の代替わりを円滑にすることも課題のひとつだろう。

個別の感想では、例年同様に、「個人で豊橋から行きにくい所を1日で、その上500円でまわることができ有意義」など、知識としては知っていても、実際にはなかなか行くことができない場所に行けたことへの好意的な感想が多く寄せられた。また、「先生方の解説が楽しく贅沢な旅行」「先生方のアナウンスがとても勉強に」「先生方や学芸員さんの話がよかった」などの感想もあり、専門的な解説を直接現地地で得られるという本企画の特長は十分に示せたと考えている。このほか、食事に関する好意的意見は先述した。あくまで地域見学会である性質上、観光ツアーのような食事の豪華さを競うことや売り物にすることは避けるべきではあるが、どの地域にもその地域ならではの料理はあるはずで、それを堪能することもまた地域見学のひとつのあり方であろう。今後とも、地域見学に資する範囲で、食事の提供等を含めたパッケージとして企画全般を練っていく意義はあると考える。

企画への不満や要望としては、昨年度同様に「トイレ休憩が少ない」「見学時間が短い」「焼津か井伊谷をどちらか一方を1日かけてじっくり廻ってもよかったと思います」など、タイムスケジュール面での意見がみられた。トイレの時間が足りなかったことは失態であり改善したい。また、盛り沢山の内容にしたと思うのが企画側の人情であるが、特定の地域に関して、教員等が案内するだけの単なる物見遊山的ツアーにせず、参加者個々人が地域に自分の目と足と頭でとことん向き合うというのも地域見学会のひとつの趣旨であろうことから、時間配分についても今後の反省材料といえる。ただ、バスツアーという性質上、あまりひとところにとどまり続けるのはやはり合理性を欠く。バランス配分の余地は当然あるが、地域見学会はあくまで「見学」

であり、更なる探求の呼び水として、「次はじっくり見てやろう」「次は地域の方々とゆっくり話をしたい」などという次につながる契機になれば、まずは喜ぶべきではないだろうか。

■謝辞

地域見学会の実施にあたっては、次の皆さまにご厚情を頂戴しました。焼津市教育委員会文化財課の細田和代さま、焼津小泉八雲記念館学芸員的那須野絢子さまには、ご多忙の中、懇切丁寧に施設のご案内や解説をしていただきました。綜合郷土研究所研究員の内浦有美さまには、予備調査にご協力いただきました。豊鉄観光バス(株)運転手の山本美徳さまには、終始安全かつ堅実なバスの運行をしていただきました。スケジュール通りの企画進行ができたのは、山本さまの運転あってのものであります。また、当日の参加者の皆さまには、アンケートにご協力いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

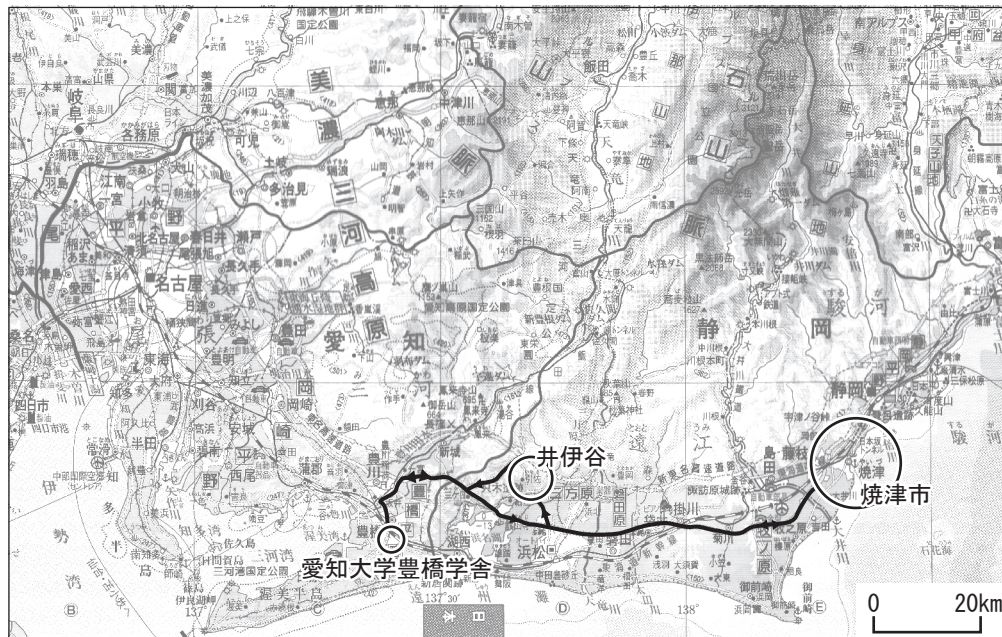


図1 地域見学会の行程
(帝国書院『新詳高等地図帳』110ページに加筆)

表1 総合郷土研究所地域見学会(2017年12月10日)タイムスケジュール

9:00	愛知大学豊橋キャンパス正門前集合(総勢23名)、貸切バスに乗車して出発 東名高速道路豊川インター⇒東名高速道路経由で静岡県焼津市へ
11:05	焼津市歴史民俗資料館着・見学 学芸員による展示解説
11:45	焼津市小泉八雲記念館着・見学 学芸員による展示解説
12:30	焼津港着、まぐろ茶屋にて昼食 昼食後各自散策
13:30	再集合⇒東名高速道路経由で浜松市井伊谷へ
15:00	井伊谷・龍潭寺着 全体見学後井伊谷を自由散策
16:30	龍潭寺にて再集合⇒新東名高速道路浜松いなさJCから新東名・東名経由で豊橋へ
17:30	豊橋駅前で希望者は下車
17:45	愛知大学豊橋キャンパス正門前にて解散



図2 井伊谷の概観
 (「地理院地図」に加筆)

表2 地域見学会参加者アンケート回答結果の集計 (配布・回収19件)

問：企画への満足度	問：参加のきっかけ	問：来年も参加したいか
大満足 10 (13)	チラシ・掲示をみて 8 (3)	ぜひ参加したい 8 (11)
まあ満足 9 (21)	先生や同僚に誘われて 7 (26)	企画次第では参加したい 9 (12)
普通 0 (3)	友達に誘われて 3 (3)	参加する気はない 0 (2)
やや不満 0 (1)	その他 1 (3)	わからない 2 (11)
不満 0 (0)	無回答 0 (1)	無回答 0 (2)

※ カッコ内は昨年度の参加者アンケートの結果 (回収38件)

(7) 資料整理作業報告

2016年12月から2017年11月におこなった収蔵史料の整理について簡単に紹介する。

1. 新収蔵史料の目録作成

三河国八名郡乗本村菅沼家文書 (2)

(史料群No.291)

新収蔵史料ではないが、本年度、中部産業研究所より返却された史料である。受入やその後の貸出の経緯は定かでない。記録や目録がないため、目録を作成した。地券291点・帯3点の計294点。菅沼氏が八名郡乗本村・設楽郡長篠村に所有していた土地が記載されている。文書群No.33乗本村菅沼家文書(これを(1)とする)に関連する文書群と思われる。

通覧すると、山間地土地所有の実態がわかる。また、すべてに大日本帝国政府の地券証明紙が使用されており、その様式の変遷をたどることもできる。

中産研からは、これとは別に大判の居宅図(1点)と静岡県の名所絵図(単色刷、3点)の返却があり、絵図として整理した。

三河国設楽郡古戸村文書 (史料群No.292)

本年度購入史料の内のひとつ。総点数116点。うち29点は正保3～寛文12年(1646～1672)の古戸村年貢割付状(No.1-1～29)。山間地であり、土地証文には杉山・杉木や椎茸山・椎茸木を売買する様子がみえる。古戸村では酒造にも取り組んでいたようだが、野田村の者が酒名代を買い取り、そちらに統括されることとなった(No.64・65)。

公儀との関係では、古戸村は赤坂役所の支配所となっており、村役人らが役所から御油宿の伝馬御救金を拝借していた(No.57～63)。

遠江国横須賀領石野村文書 (史料群 No.293)

購入史料。総点数77点。横須賀藩領であっ

た石野村(現・袋井市愛野)の史料である。



貼紙や鉛筆書きの書込みがあり、過去に一度整理された形跡がある。

史料には窪野氏の名がみえるが(No.54ほか)、『袋井市郷土史料目録』・『袋井市史』などに掲載の「窪野功武家文書」・「窪野兼義家文書」とは重複しない。窪野家関係の文書群ではあるものの、古書店より購入のため窪野家内での具体的な伝来過程は不明。

77点のうち53点は石野村の年貢免状である。「窪野功武家文書」所収年貢免状の後に続くもので、合わせて確認することで石野村の年貢割付状況を知ることができる。このうち、一部に糊離れしたバラの料紙(3枚、No.53)もあることから、残りの料紙の行方が気になるところである。接合する料紙は伝来過程で紛失したのか、窪野家諸家や古書店に残っているか、状態は不明だが、どこかに残存していることを期待したい。

2. 歌川研究室文書の整理

昨年度に引き続き、本研究の未整理古文書のうち「歌川研究室文書」の整理を行った。

同文書群の整理が終了し、目録を配架したので、機会があれば御覧いただきたい。分類・整理した小文書群は、以下の通りである。

活 動 報 告

小文書群 No.	小文書群名	点数 (総点数)
A-1	吉田家中町方文書	128 (138)
A-2	尊勝院差出文書	20 (21)
A-3	渥美郡畠村文書	3
A-4	八名郡浪之上村文書	7
B-1	渥美郡保美村山本家文書	2
B-2	渥美郡海面開発関係文書	5
B-3	八名郡能登瀬鈴木家文書	124 (144)
B-4	東三河諸村地租改正関係史料	13 (36)
B-5	駿河国富士郡岩本村堂社境内図	8
B-6	志摩国英虞郡関係文書	3
C-1	渥美郡馬見塚村渡辺家文書	87 (90)
C-2	八名郡金田村文書	43 (48)
C-3	八名郡牛川村松坂家文書	23 (120)
C-4	宝飯郡大木村島田家文書	3
C-5	設楽郡新城上町村松屋山田家文書	12
C-6	林孫平次関係文書	15
C-7	渥美郡村誌	14
C-8	駿河国富士郡大宮文書	5
C-9	加賀領江州今津弘川・海津村文書	11
D-1	渥美郡野田村役場文書	110 (132)
D-2	宝飯郡国府村平松氏関係文書	4 (5)
D-3	八名郡日下部村市川氏関係文書	17
D-4	八名郡清井田村文書	5
D-5	設楽郡山林売買文書	25
D-6	幡豆郡上矢田村杉浦氏関係文書	11
D-7	碧海郡新堀深見氏関係文書	10
D-8	碧海郡川野村宗圓寺頼母子関係文書	5
D-9	大和田村文書	2 (29)
D-10	加藤利兵衛関係文書	2 (17)
D-11	林和七関係文書	14

D-12	小野吉次郎関係文書	4
D-13	大黒屋差出文書	7
D-14	武蔵国北葛飾郡堤村文書	2
D-15	茶道具配置図	12
E	白須賀宿・境宿新田関係文書	90 (117)
A～F	個別・未分類文書	計 235 (236)
	全体の総計	1081 (1333)

上記のうち、ほんの一部ではあるが紹介しよう。能登瀬鈴木家文書（B-3）は、新城市出身で別所街道開設に尽力したとして知られる明治の政治家・鈴木麟三に関する文書群で、県会・国会議員として活躍した様子がわかる貴重な史料である。次いで馬見塚村渡辺家文書（C-1）には、尾張藩初代藩主徳川義直の書状（No.39）や半原藩札（No.34-1～3、橘敏夫『郷土研ブックレット 22 藩札』参照）などの珍しい史料がある。富士郡大宮文書（C-8）には、慶長14（1609）年の大宮村検地帳（No.1）など江戸初期の検地帳があり、郷土研所蔵文書全体の中でも年代の古い史料が含まれている。白須賀宿・境宿新田関係文書（E）には、幕末～明治初期の人馬継立に関する史料が多数みられる。

3. 八名郡牛川村松坂家文書（史料群No.10）

約2500点の史料の整理を行なった。領収証や書状・新田経営・年貢関係の史料が多い。書状には関屋衛盛・水野小一右衛門など吉田藩士からのものがあるが、その多くは年始挨拶・暑中見舞い等への返書である。ほかには子供の初節句や袴着の祝儀帳、婚礼関係の史料がみられた。

（文責 臨時職員 荒木亮子・山下智也）

愛知大学総合郷土研究所「紀要」投稿要項

(目的)

第1条 この規定は愛知大学総合郷土研究所（以下郷土研という）「紀要」への投稿及び編集に関する基本的な事項を定めるものである。

(紀要が対象にする空間領域)

第2条 「紀要」が対象にする空間領域は、東海地方及び隣接諸地域とする。

(編集担当委員)

第3条 「紀要」の編集は、郷土研運営委員会構成員の中から選出された編集担当委員がおこなう。

- 2 編集担当委員は、投稿された原稿が第2条に合致する空間領域内を対象にすることは是非を判断する権限を持つ。
- 3 編集担当委員は、受理された原稿の内容に関わらない、「紀要」全体を通しての体裁及び形式についての権限を持つ。
- 4 編集担当委員は、投稿者が提出した英文タイトル及び氏名を、適切な手順を経て修正する権限を持つ。

(著作権)

第4条 すべての著作権は郷土研に属する。

(著者)

第5条 原稿の著者は、郷土研の所員、非常勤所員、研究員、補助研究員とする。ただし、郷土研運営委員会が特に認めた場合にはこの限りではない。

- 2 補助研究員は、所員の指導と校閲を経た原稿であれば、単名で投稿することができる。

(原稿の提出)

第6条 原稿の提出方法は、執筆要領で定める。

(校正)

第7条 著者校正は3回以内とする。校正は原則として誤字脱字のみとし、大幅な変更は認めない。

(国立情報学研究所情報ネットワークへの掲載)

第8条 「紀要」は全文が国立情報学研究所情報ネットワークのデータベースに掲載され、閲覧できる。

- 2 上記データベースへの掲載を希望しない投稿者は、原稿提出時に郷土研事務室へその意志を文書で伝達する。

愛知大学総合郷土研究所「紀要」執筆要領

1. 原稿

- 1) 原稿は和文で作成する。
- 2) 原稿の種類は、論説、研究ノート、資料紹介、講演及び討論記録、書評等とする。
- 3) 原稿は原則として電子媒体で作成し、図表も含めて完全原稿を投稿する。
- 4) 原稿は横書きで作成し、A4判紙で1ページ40字×40行を目安とする。
- 5) 原稿には、200字程度の和文要約と英文のタイトル及び氏名を添付する。
- 6) 電子媒体で作成した原稿は、電子記憶媒体と印字紙を提出する。

2. 書式

- 1) 数字は算用数字を使用する。暦年は専門分野の習慣による。
- 2) 図表にはそれぞれ通し番号を付け、図の表題は図の下に、表の表題は表の上に記載する。
- 3) 注記は本文の該当箇所の右肩に注記番号を付け、原稿の末尾にまとめて記載する。
- 4) 引用・参考文献の表記法は専門分野の習慣に従えばよいが、著者名、書名または論文名、雑誌名(号数)または発行所(者)名、刊行年、該当ページまたは総ページ数を記載する。欧文学術文献の雑誌及び書名は、イタリック体(または該当箇所をアンダーライン)で表記する。
- 5) 英文のタイトル及び氏名は、従来の書式に従って作成する。

2017 年度研究組織〔所

〔所	長〕 神谷 智			
員〕	阿部 聖	有菌正一郎	飯塚 隆藤	
	伊東 利勝	岩崎 正弥	印南 敏秀	
	宇佐美一博	櫻村 愛子	加藤 一己	
	加納 寛	神谷 智	木島 史雄	
	近藤 暁夫	迫田 耕作	須川 妙子	
	鈴木 誠	高橋 貴	高原 隆	
	武田 圭太	西堀喜久夫	早川 大介	
	樋口 義治	樋野 芳雄	廣瀬 憲雄	
	安 智史	安福恵美子	山田 邦明	
	和田 明美			

〔非常勤所員〕 安藤 勇 市野 和夫 井口 喜晴
 伊村 吉秀 小笠原久和 交野 正芳
 加納 俊介 佐野 賢治 沢井 耐三
 杉本 一郎 田崎 哲郎 玉井 力
 西尾林太郎 藤田 佳久 別所 興一
 堀江登志実 宮入 興一 渡辺 和敏

〔研 究 員〕 天野 景太 荒木 亮子 岩原 剛
 内浦 有美 大久保あかね 榎原 将人
 権田 浩美 佐藤 泰子 杉浦 博子
 高木 秀和 高橋 賢 橘 敏夫
 塚本弥寿人 佃 隆一郎 内藤 聡子
 内藤 路子 長屋 隆幸 西尾 美徳
 菱川 晶子 日比野浩信 平川 雄一
 藤喜 一樹 古田 功治 保住 敏彦
 松岡 敬二 松田香代子 松村 美奈
 三世 善徳 村瀬 典章 森田 実
 山下 智也 和田 実

〔補助研究員〕 野田 賢司

〔運 営 委 員〕 (庶 務) 近藤 暁夫
 (資料収集) 廣瀬 憲雄
 (企 画) 武田 圭太
 (紀要編集) 山田 邦明

〔事 務 局〕 小林 倫幸